

令和4年度 山形県立荒砥高等学校 学校評価書

自 己 評 価 達成度 5:きわめて達成度が高い、4:概ね達成できた、3:できた、できないが半々くらい、2:達成できないことの方が多い、1:ほとんど達成できなかった					次年度に向けて	
重点目標		具 体 的 目 標	達成指標や方策など	達 成 状 況	達成度	
1	「信頼され、前進する荒高生」の育成	① 自他の「いのち」を大切に、いじめのない心身ともに健康な生徒を育てる。	・いじめや体罰のない学校づくりのために、年3回の実態調査を実施し、適時の指導に努める。 ・悩みや問題を一人で抱えることのないように、面談を適宜実施し、相談しやすい環境づくりに努める。 ・生徒会の「あいさつ運動」や「リスペクト運動」を通して、良好な人間関係づくりを進める。	○いじめや体罰のない学校づくりのために、計画通り実態調査を行い、適時の指導に努めた。 △アンケートや実態調査後に、全職員での共通理解を図って進めて行くことが必要である。 ○年2回の面談週間を設定し、それ以外でも必要な場面で担任が面談をするなど、相談しやすい環境づくりに努め、きめ細やかに対応できた。 △生徒一人ひとりの特性を理解し、教員自身の言動を振り返り、生徒に寄り添った指導を徹底する必要があった。 ○生徒会の「あいさつ運動」や「リスペクト運動」、保健委員会の「モニトプロジェクト」「クリスマスエール」「保健指導」、また、各種学校行事等を通して、良好な人間関係づくりの構築に努め、様々な場面で生徒の成長が図られた。 △生徒会の「あいさつ運動」や「リスペクト運動」が全体に周知されていなかった。また、このような運動が、良好な人間関係づくりに寄与しているのか評価していく必要がある。	3.8	・次年度も面談週間を年2回設定する。 ・クラス担任を中心とした年次が生徒と面談しやすい条件整備や、多様な視点で生徒を見る体制づくりを職員全体で整えている。
		② 「凡事徹底」の下、基本的生活習慣を確立させ、自律と自立ができる生徒を育てる。	・さくら連絡網を利用した「健康チェック」を徹底し、自己管理能力を高める。また、生徒の状況を早期に把握し、問題等があれば、保護者と連携しながら対処する体制を整える。 ・「当たり前のことが当たり前にできる」ように、年次やクラスの指導を充実させ、自律心、自立心を養う。 ・生徒会が中心となって服装やマナー遵守を呼びかけ、違反0を目指す。	○さくら連絡網を利用した「健康チェック」を実施し、生徒の状況把握に努め、問題があれば保護者と連絡を密にしながらすぐに対応できた。また、「保健だよ」等の資料もペーパーレスで配布し、自己管理意識の高揚を促すことができた。 △健康チェックについて、生徒・職員全員に徹底させることが難しく、養護教諭の負担も大きかった。 ○生徒会活動、委員会活動、部活動等を通して積極的に取り組む場面が見られ、自律心、自立心を養うことができた。 ○生活委員を中心とした服装・身だしなみ点検を計画どおり実施した。また、生徒会を中心にマナーアップ運動を行った。学校生活におけるマナー遵守が達成されている。	4.2	・新型コロナウイルス感染症が5類に引き下げられたあとの問題点を想定し、校内での体制を整備しておく必要がある。
		③ 授業を第一に基礎学力を定着させ、発展的な学習にも主体的に取り組む生徒を育てる。	・全年次とも朝学習を定着させて基礎学力を養い、授業に向かう姿勢を高める。 ・教科・年次で連携し、課題提出100%を達成させる。 ・総合学科の特徴を活かした上位層への指導の充実を図る。また、進路希望に応じた個別指導を充実させる。	○新聞コラムを読んだり、国語・数学の基礎学習をしたり、読書をしたりと、各年次が工夫した朝学習を行った。落ち着いた1日を始めるための良い習慣となっている。 △課題の提出率は概ね良好だが、100%提出までは至らなかった。提出できない生徒へは個別対応しながら提出できるように促したが、固定化している。 ○生徒との面談を通して進路意識を向上させ、具体的な目標を考えられるよう指導を行った。 △学校全体として上位層を伸ばす手立て・体制づくりを進めることが必要である。	3.8	・年次と教科との連携を密にしながら課題提出100%をめざす。 ・課題の出し方についても、個別最適な視点を取り入れることを検討していく。
		④ 地域貢献活動や部活動、資格取得等に積極的に取り組み、自己実現をめざす生徒を育てる。	・年次ボランティアの他にも自主的に1回以上のボランティアに参加する。 ・生徒会主体でボランティアの企画・参加者募集に取り組む。 ・漢字検定、実用英語技能検定、数学検定、ビジネス文書実務検定、情報処理検定、世界遺産検定等の検定試験や介護職員初任者研修、救急法救急員講習等の資格試験へ積極的に挑戦させる。	○漢字検定2級1名、準2級2名、3級2名合格。数学検定（一次）4名合格。英語検定2級1名、準2級1名合格。ビジネス文書実務検定1級1名、2級2名、3級2名、同速度部門2級3名、3級4名合格。食物調理技術検定3級1名、保育技術検定（言語表現技術）3級1名合格。世界遺産検定4級1名、3級1名合格。進路を意識した2年生の挑戦が目立った。 △赤十字救急法救急員、看護体験、保育ボランティアについては、新型コロナの影響で実施できなかった。また、生徒会主体のボランティアについても、コロナ禍の中で依頼そのものが少なく、取り組みなかった。 △各種検定試験の検定料が以前に比べて高くなっている。高額な検定料によって、受験者数が増えない側面がある。 ○コロナ禍にあっても、紅花摘み全校ボランティア、フラワー長井線車両清掃ボランティアは実施でき、地域貢献の意識を高めることができた。	2.7	・ボランティア活動に対して自発的な参加となるように、生徒の意識向上を図り、積極的な参加を目指す。 ・自己の資質向上（研鑽）になることを理解させ、各種検定への挑戦を促していく。 ・スモールステップからの資格取得によって自己肯定感を醸成し、進路目標達成につなげる。
2	魅力ある学校の創造	① 「荒砥高等学校魅力化に係る地域連携協議会」での魅力化・活性化策を推進する。	町との連携を深め、以下の項目を実践していく。 ・基礎学力の充実、就業体験活動の充実、地域課題解決型学習の推進、教科横断カリキュラムの実施、小規模校との交流、中学校との交流・研修を進める。 ・地域スポーツクラブ等との連携の検討、オープンスクールの充実、高校見学ツアー等開催の検討、WEBによる情報発信強化、高校魅力化コーディネーターとの連携等による魅力化を推進する。	○教科「教養基礎」や放課後学習会等の実施により基礎学力の定着・充実を図った。また、小規模校サミットへの参加も行い、全国の小規模校と交流することができた。 ○就業体験活動の充実に加え、1年次において「町内産業魅力発見ツアー」を新たに実施し、地域産業への興味関心を高め、働く意義の学びを深められた機会となった。 ○オープンスクールや学校説明の機会を充実させ、多くの中学生・保護者に本校の教育活動や特徴を発信できた。 △コロナ禍により、中学校との交流や研修、地域スポーツクラブとの連携の検討を進めることができなかった。	3.9	・教員数削減により、魅力化推進のためのマンパワーが不足している。業務軽減を図りながら進める必要がある。 ・中学生だけでなく、在校生全体が魅力とを感じる学校づくりにも焦点を当てていく。
		② 新教育課程の具現化とキャンパス制の効果的な運営を行う。	・教育課程を円滑、かつ効果的に運用し、授業改善を進め、学習効果を高める。 ・系列の特徴を生かし、生徒個々の進路目標の実現に向けた適切な科目選択を進める。 ・「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」の内容を次年度以降に向けて改善を図る。 ・日常の活動をキャンパス制の視点で見直し、互いのメリットとなるよう積極的な活用を行う。	○新しいカリキュラム初年度ということもあり、効果的に運用できるように努めた。授業改善を進める上で研修・研鑽の場を持つことができた。 ○科目選択は一人一人に丁寧な面談しながら円滑に進めることができた。また、系列の特徴を生かした授業実践も見られた。 △系列の特徴を生かした学習指導や進路指導等の情報発信が必要である。 △コロナ禍の中で中断していたキャンパス制の事業を再開できたものもあったが、互いの文化祭視察等の交流は実施できなかった。ポストコロナを見据え、互いのメリットとなる新たな事業を模索する必要がある。	3.6	・「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」において、地域課題解決型探究学習を位置づけ、推進していく。 ・教員の研修の場をさらに設けながら授業改善を図っていく。
		③ 授業改善やICT機器活用により、学力向上や探究的な学びの充実を図る。	・校内授業公開週間や公開授業研究を通して、主体的・対話的な学びを意識した授業方法を研究・実践していく。 ・ICTの効果的な活用方法の研修を深め、協働的・探究的な学びを推進する。 ・年2回授業評価を実施し、PDCAサイクルによる授業改善を進める。	○生徒一人一台端末の整備により、授業等で大いに活用できた。 ○校内授業公開週間ではICTの活用や、観点別評価を授業改善に活かすテーマで授業を行い、事後研究では情報交換を行いながら個々の授業改善に活かせる機会となった。 ○授業評価を1学期末と年度末の2回行い、授業改善に生かすことができた。	3.5	・今後も校内授業公開を継続し、研修の機会を継続していく。 ・ICT機器を活用することが目的ではなく、主体的・対話的・協働的・探究的学びをどう具現化していくかという視点が必要である。
		④ キャリア教育の充実を図り、進路目標の達成を目指す指導を行う。	・産業社会と人間、総合的な探究の時間、特別活動において一貫したキャリア学習を進め、生徒の自己理解と進路意識を深めさせる。 ・教科担当者・年次団を中心に、進路意識の高揚と目標維持に努め、資格取得や外部検定試験等への挑戦を促す。 ・就職・進学両面のきめ細やかな指導体制を構築し、生徒一人ひとりの希望の実現を目指す。	○「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」を柱としたキャリア形成の推進は、概ね達成できた。 ○年次を中心に就職・進学ともに希望に応じた指導を実施し、12月上旬まで3年次全員が希望を達成できた（就職11名、進学10名）。 ○会議資料をe教務と連動させ効率化を図った結果、就職等の応募が機を逸さずに対応できた。 ○面接・小論文・作文・学科試験対策に職員全体で指導する体制を整えることができた。	4.0	・キャリア形成と探究活動のバランスのとれた計画と取り組みを推進する。 ・進路の早期決定と早期対策、卒業後に向けた持続的な対策を推進する。 ・会議資料作成等の業務のさらなる効率化を図る。
		⑤ 個別最適化した指導により、生徒一人一人が生き生きと学ぶ姿勢を育てる。	・生徒一人一人の特性を把握・共有し、外部専門家とも連携した個別支援の体制を充実させる。 ・ICT等を最大限活用し、個別最適な学習を推進する。	○通級指導では外部専門家と連携しながら効果的な指導ができた。また、生徒理解研修会、MC特別支援委員会、SCやOT面談を通して生徒理解に努め、寄り添う支援を展開できた。SC面談を設定し、相談をしてみるという試みも行い、継続面談につながったケースも見られた。 ○教育支援員の適切な配置により、主に国、数、英における個別支援の充実が計られ、学習意欲の向上につながった。 △個別最適な学習をどのように提供していくか全体で検討していく必要がある。	3.9	・教育支援員を適切に活用しながら、個別最適な学びができる体制を整える。また、支援体制や方法の共通理解も必要である。 ・ICT活用の学びにおいて、いかに深く思考させるか、いかに評価していくか研究が必要である。
3	地域と連携した特色ある教育	① 地域貢献活動や地域との連携・交流に積極的に取り組み、地域の理解と支援を得る。	・地域の行事やボランティア等の機会を創出し、地域との交流を一層推進する。	○「紅花摘みボランティア」「産業フェア」におけるコラボ販売企画、年次ボランティア等への参加を通して、地域との交流を深めることができた。 ○生徒保健委員会主導で地域健康活動の「健紅マイルージ」に全生徒が参加した。 △コロナ禍の中でボランティア活動が制限された。また、ボランティアの依頼があっても、限られた一部の参加が多く、全校での取り組みが必要であった。 △生徒の負担も考慮し、「地域との連携」と「通常の授業時間の確保」のバランスが必要と思われる。	3.5	・引き続き地域とのかかわりを継続し、交流を深め、地域の魅力を学ぶ機会を作っていく。
		② 地域の資源を活用して、総合学科としての特色ある教育活動を推進する。	・教育活動全般を通して地域の産業や文化に触れ、地域の外部人材を活用しながら教育活動の充実を図る。	○「産業社会と人間」において、地域の産業・文化に触れる機会を創出し、大変有意義であった。 △地域の人材や資源を発掘し、活用促進を図り、地域を理解し、地域と交流を深める教育活動を推進する。	3.0	・「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」の年間計画に地域の資源を活用するプログラムを位置付けていく。
		③ 中学生・保護者・地域に、積極的に教育活動の成果を情報発信する。	・1日体験入学や中学校進路学習会において、生徒を前面に出したPR活動を展開する。 ・ホームページやSNS、広報誌「かわら版」やマスコミ等を活用し、教育活動や成果などを広く情報発信する。	○早い段階での学校パンフレット、PRポスターを制作し、1日体験入学や中学校進路学習会では2、3年次生の生徒会が中心となってPR活動を行うことができた。 ○生徒目録でのSNS発信や、定期的なホームページ更新により、教育活動を広く発信することができた。	4.3	・1日体験入学では、より多くの中学生から参加してもらえるような日程を設定し、生徒主体としたPR活動を継続して行っていく。
学校関係者評価	・概ね良かったのではないと思う。「明るい挨拶、元気な返事」について何かしらの対策が必要。 ・資格の取得の目標は見直しが必要ではないか。卒業までの資格取得の目的と計画をしっかりと割り出すなど年間計画を示してはどうか。 ・「地域への参画」「地域への発信」など、地域での活躍の様子や満足度・貢献度などがつかめる項目があれば、さらに確かなものになると思う。 ・自主性の引き上げが低評価の部分の底上げになるのではないかと。また、ボランティア活動の例として親子ボランティアなどを考えてはどうか。 ・「一人ひとりを認めて伸ばす指導」については小規模校ならではの成果であり、生徒の姿を通して誰もが認めるところだと思う。 ・地域や中学生との連携・交流は、視野を広げたりコミュニケーション力を育てたりするために重要だが、生徒の実態に即した負担の少ない活動を探る必要もある。 ・挨拶については、すでに実践されていると思うが、まずは大人（先生方や保護者）がしっかりと生徒たちに向き合って大きな声で毎回挨拶を交わすことが一番効果的。挨拶が基本となり、そこからコミュニケーションにつながるのと、それができない生徒がどんなに学力を伸ばしても、「なりたい自分」が見えてこないと思う。					